
名もなき

薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名もなき

【Nコード】

N3364U

【作者名】

薫

【あらすじ】

一つの墓標の前に佇む、一人の少年。

彼が新たな道を歩み出すまでの、短い時間の出来事。

「先生・・・俺は痛くなんかないよ」

乾いた大地に突き立てられた、一つの木片。

その前に力なく座り込んだ一人の少年は、渴いた瞳で宙を見ていた。

それはただの木片ではなかった。

かつては彼の恩師だったもの。

それがいまではただの木片へと姿形を変えていた。

その変わり果てた恩師の前に、一人の少年はずっと座り込んでいた。

それは墓標だった。

名も何も刻まれてはいないが、確かに墓標であった。

そこは、墓場と呼ぶには余りにも寂しい場所。

風が吹きさらし、砂ぼこりが舞う荒れ地。

そこに、ぽつんと一つだけ立てられた墓標。

そこに亡骸が埋まっているとは到底思えない。

おそらく、故人に関わりのある地に、故人を偲んで立てられたものなのだろう。

少年がいつからそこにいたのかは分からない。

顔の左側を布で覆っており、表情はほとんど見ることができない。

いや、そもそも表情などないのかもしれなかった。

少年は、その墓標に向かい、ぼつりぼつりと言葉をつむいでいた。

「先生、俺は平気だよ。

たとえ片腕を無くしても、もう片っ方の腕で剣を握るよ。

たとえ片足を無くしても、もう一本の足でどこまでも駆けていくよ。

だから……

だから、片目を失ったって俺は平気だよ。

右目で世界を見ればいいだけなんだから……全然、困りやしねえんだ」

そこまで言うと、ギョツと辛そうに口を結んで下を向いた。

その先の言葉が、どうしても出てこなかった。

少年は、懸命にこらえていた。

自分の奥底から溢れ出る衝動を。感情を。

その年にして、懸命に自身を律しようとしていた。

だが、それも限界だった。

微かにその小さな肩が震えているのが見てとれる。

少年は、小さな掌を悔しそうに握りしめた。

「……でも……どこを探してもあなたがないのは辛い……
辛いよ……先生……」

そう吐き出すと、少年は空を仰いだ。

雲一つなく、もし背に羽さえあればどこまでもどこまでも飛んでいけそうな、そんな高い空だった。

「こんな世界なんか・・・」

そこまで言いかけて、ぎっ、と少年は歯を食い縛った。

粗末とはいえここは仮にも師の墓前である。彼なりに振る舞いは選んでいるのだろう。

喉まで込み上げる、その禍々しい言葉を食い殺そうとしていた。

「・・・先生・・・」

しかし、それを飲み込むことは彼にはできなかった。

「あなたを殺したこんな世界なんか、もういらねえ」

少年の残された右目が、紅く、鈍い光を宿す。それと同時に、少年の目から輝きを奪った。

「こんな世界が正しいはずがねえ・・・
先生を殺したこんな世界が必要なはずがねえんだ！」

そう言い切ると、少年はおもむろに立ち上がった。立ち上がると、そのまま墓標に背を向けて歩き始めた。

その時、どこからか声が響いた気がした。自分の名を呼ぶ、あの懐かしい声。

しかし、少年がそれに答えることはなかった。

吹きすさぶ風嵐の中で、幻聴だと思ったのか。はたまた、幻聴だと自身に思い込ませたのか。
それは少年にしか分からない。

こうして、少年が名のない墓標を振り返ることは二度となかった。

(後書き)

と、まあ・・・なんのこっちゃという話ですな。すみません。

このシーンが漠然と頭の中に浮かんだものの後に繋げる話までは思
い付かず、お蔵入りにするのもなんだしなと思いついて投稿した・・・所
謂ネタ帳チラ見せみたいなき感じですよw

どう感じるかは人それぞれ、ということ。独自の解釈で楽しんで
いただけたら幸いです。

m
ここまで読んでくださってどうもありがとうございます(´▽｀)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3364u/>

名もなき

2011年10月6日21時55分発行